付け加えることができる価値は何か？

～82000 キロ離れてみた経験から～

1

千葉　晃央

パスポート取得から

6 年前のニューヨーク以来、海外には行っていない。今回、お役目をいただいているフォスタリングソーシャルワーク専門職講座（日本財団助成　立命館大学人間科学研究所 臨床社会学プロジェクト）のスタディツアーでオーストラリアのメルボルンへ研究視察に行くことになった。受講生、講師陣と共に現地での先進的な取り組みから学ぶことを目的とし、日本のフォスタリングソーシャルワークの発展に寄与することを狙いとしている。

失効していたパスポートを申請し、取得したのが 2022 年 12 月。現地ではクレジットカードでの買い物が普通！と聞いて、あまり使わなかったカードを使えるように環境変更。空路を聞いたのが 2 月に入ってから。ビザ？発給はアプリという時代に。とにかく対応の準備を進めた。

機内持ち込み手荷物は１つ？！

荷物も前回はロストバゲージを防ぐためにも預けずに行った。今回もそうしたいので機内持ち込み可サイズのバックパックと手持ち袋にした（これが間違いであることに気づく）。意外と大きくなってしまったのはツアー携行品の運搬のためである。出発は 2 月 25 日（土）。雪がちらつく京都から、まずは羽田空港へ。ここに来るのは相当ぶり。久々の海外なので余裕をもって動くしかない（後でこれが効いてくる）。新幹線を乗れるタイミングで指定席をゲット。この

日はものすごい人出。京都駅も大混雑。結果、乗った新幹線はデッキでの立ったままの利用がある状況。指定席で良かった。体力温存のためにも。品川駅で降りて、京浜急行で羽田駅へ。昼食を日本食最安値にして、メルボルンの本購入。出発の京都駅新幹線売店で見つけた新書『物語 オーストラリアの歴史　新版-イギリス植民地から多民族国家への 200 年』(竹田いさみ，永野隆行　中公新書)も併せて読みながら過ごす。航空会社カウンター共用のため、出発近くなってからカンタス航空窓口がオープン。そこでその直前に近くに行くとエコノミーは持ち込み荷物一つと書いてある！事前にＨＰで確認したが実はそこはビジネス以上のところを見ていたことがわかる（日本語に翻訳しているからか表記があいまいだった、でも言い訳か)。そのビジネスクラス以上は 2 個オッケーと書いてあった。国内線の感覚と同じなのでそれでいいと思ってしまった！荷物のサイズも重さも確認したが、そもそも間違っていた！持ってきたバックパックには鍵がない。以前、京都の福祉施設職員を海外福祉施設に派遣交流する事業担当していた時などに、ロストバゲージの様子をしばしば見てきた。やはり、これはよくない…。なんといってもツアー携行品がある。そのため、急遽スーツケースを買うしかないと判断。到着していた羽田第 3 ターミナルには店が見つけられない（後で見つけた…)。電車一駅の羽田空港第 1、第 2 ターミナル駅へ。国内線のターミナルに移動。駅前のショップでスーツケースがあったため購入。鍵の取り扱いなど駅の椅子で広げて覚える。国際線ターミナルに戻り、荷物を入れて荷造り。バゲージバンドも、目印シールも買って仕上げた。やばかった。

ヘイヘイ…セルフォン！

同行するＵさんとは羽田で合流にしてもらった。カンタス航空カウンターで荷物を預けて、出国手続きへ。何もかもデジタル化。パスポートも。差し込んで、写真撮影、発券程度で進む。中に入ると羽田空港も広い。乗り込むとヘッドフォンが置いてあるが包み紙にお金が書いてありよくわからず。周囲を見てもブルートゥースで聞いている

人がほとんど？あとでお金表記はユニセフの寄付の広告ときく。音はなしで、絵だけを観ながら、そして寝ながら 9 時間移動。22 時発の夜行便。出発後にも機内食あり。9 時間、それにしても狭い。席も満席。2 時間時計をはやめて、オーストラリアにあわせる。寝たような、寝ていないような。そして起きたら朝食機内食。どっちも和風にした。まずくはない。ＣＡは年配の男性ばかり。シドニー到着。ここが経由地。次は国内線でのトランジット。カンタス航空は専用のバスとターミナルを保有。荷物もターンテーブルか

ら受け取り、再度メルボルン行きのために預けたけど、チケット確認も何もなかった。無事着くのか？と不安。ここで、椅子に荷物をおき、整理をしているとスマホを落としていた。「ヘイヘイ…セルフォン…！」異国の方に親切な方に声をかけていただく。

シドニー空港でコーヒーを。空港ターミナルのいい場所には「相撲サラダ」に、「巻きずしテリア」…。ここから買い物はクレジットカード。この国内線シドニーからメルボルンは世界で３本の指に入る繁忙路線らしい。機内は満席。オーストラリア

の移動は飛行機が基本ときく。「バスを乗るように乗る」と。ここでも昼食サンドイッチが出る。体調コントロールのために飲み物はアップルジュースで統一。メルボルン到着。寝不足である。一夜を機内で明かし、座りっぱなしで足腰に痛み。とはいえ、旅行会社さんが通路側に席を取ってくれていて助かる。この国内線もベテランＣＡのみ。メルボルン空港到着後、１時間前に着いていた受講生のＫさんが待ち伏せしてくれた。３人でスカイバスという空港バスに乗ってホテルへ。スカイバス終点サザンクロス駅まで乗車で分かりやすい。バスの車内の天井にＵＳＢポートがある。昨今の海外観光客にはスマホの充電が命。よくわかっている。駅到着後チェックイン。英語がはやくて聞き取れない。単語すら忘れているのも大きい。何とかＵさんのサポートでチェックイン。補償金を預ける方式。チェックアウトで返却。それにしても物価がとにかく高い。日本の約３倍。到着後、すぐに街へ出てみた。

学びを保証するという価値、

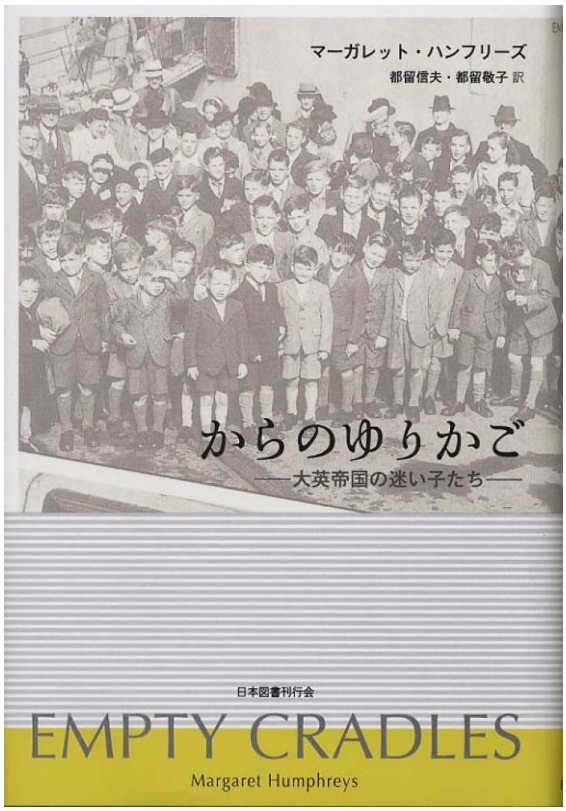
先住民を尊重する価値

ビクトリア州立図書館へ。めちゃくちゃ広い。正解で一番美しい図書館とも。あちこちで勉強している。若い人も上世代も。そして学習意欲が高まる美しさも雰囲気も作っ

ている。朝から夜 9 時まで無料で誰でも、私でも利用できる。図書館の数がとても多いのもメルボルンの特徴と教えてもらう。素晴らしい。

圧倒的に人々が若い。町で歩くのも若い人が多い。ルーツも豊か。出会わないルーツはないのではないかと思うぐらい。アジア人も多いけど、みんな微妙に会ったことがあるようでない雰囲気。オーストラリアは中学と高校で 6 年間日本語を学ぶことができる環境があると聞いた。これもオーストラリアの歴史を考えると頷ける。後でも考えることになるが、国として、存在の価値がある国（大国）として成長していく、新しい社会を模索する姿勢が感じられる。

小説「からのゆりかご」、映画「オレンジと太陽」に描かれたように、イギリスの社会的養護状況の児童をオーストラリアに強制移住させた「児童移民」を謝罪し、映画「裸足の 1500 マイル」に描かれた先住民を迫害した歴史にオーストラリア政府は謝罪をした。こういった姿勢は国際的にはもちろん、国民一人一人にも伝わるものがある。このツアーでセッションのはじめには必ず先住民への敬意を示す。ケビン・ラッド首相が、2008 年 2 月 13 日の議会で、先住民アボリジニに政府として初めて公式に謝罪。現在、こうしたセッションの始めにはこの土地の先住民への敬意を示す宣言を行うことが政府から推奨されている。実施に滞在中すべてのセッションのはじめにアボリジニの土地に住んでいること、そこを迫害してしまったこと、そしてその文化、儀式、価値を大切にし、過去と現在と未来の長老に対する敬意を払うことが宣言された。日本にも似た経緯を持つ経過もあるが…。私の生まれ、



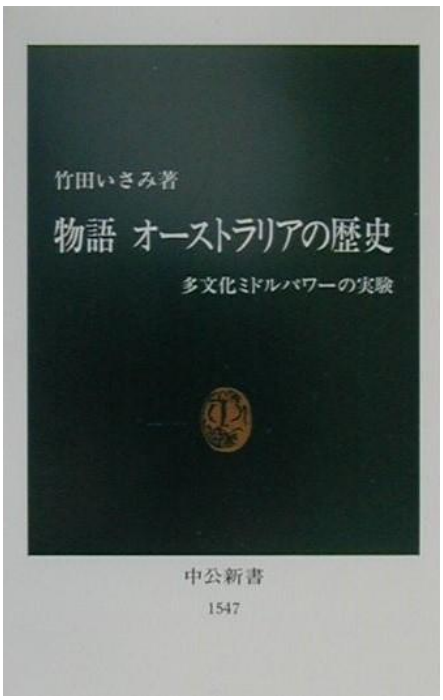
東北もこうした過去も盛り込まれた歴史がある。

オーストラリアも日本も

東太平洋、環太平洋地域の一員

オーストラリアにとって、日本は隣国の一つである。ビジネスの可能性、戦略的な可能性、協力の可能性…あらゆる関係が含まれている国同士である。第２次世界大戦でオーストラリアへ日本軍が行った空襲や特殊攻撃という史実も両国には横たわる。それらを乗り越える、許すなどを経ての未来を模索し続ける必要があるということである。

その後、ミーティングと夕食。Ｔさんの長期滞在用アパートメントで打ち合わせ。スーパーにもいく。この時点で、鼻炎がひどい。すでに機内から。メルボルンについて悪化。スーパーで探して買う。みるとインド製。調べると日本にも同じような薬有。一日１回。でも見た目が違いすぎる。錠剤が「水色の透明」なのである。ＳＦである。早速処方。それが意外と効いた。翌日には鼻水が出なくなった。即効性あり。

ホテルに戻り寝る。ラインで受講生、講師等グループをつくる。情報交換、事故防止のため。日本帰国時のコロナ関連証明の必要性が共有しきれていなくて、それぞれまちまち。Ｔさんの指導で、日本入国時に必要なＶＩＳＩＴＪＡＰＡＮの HP で作業開始。日本からワクチン接収証明写メをもらい、ＶＩＳＩＴＪＡＰＡＮに送ると検査不要の

青信号が点灯。翌日には税関申告もこれで済ませ、帰国のめどが立つ。ワクチン接種がない人、回数が少ない人はＰＣＲ検査で陰性証明を出して帰国に。参加の方々も何とか日本と連絡を取り、接収証明を補ったりして日本に帰国できそう。（続く）